

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第71号

平成21年 10・11・12月



◎銅造誕生釈迦仏立像（正眼寺） —平常展「仏教美術の名品」より—

特別展

御即位二十年記念
第61回 正倉院展

10月24日（土）～11月12日（木）
東・西新館

特別陳列

おん祭と
春日信仰の美術

12月8日（火）～
平成22年1月17日（日）
東新館

平常展

仏教美術の名品

本館 通常開館
西新館 ～10月4日（日）

中国古代青銅器

本館 通常開館



漆背金銀平脱八角鏡（北倉）

御即位二十年記念 第61回 正倉院展

10月24日(土)～11月12日(木)

東・西新館



平螺鈿背円鏡（南倉）



紫檀木画槽琵琶（南倉）



金銀花盤（南倉）

本年の正倉院展は、北倉十二件、中倉二十五件、南倉二十八件、聖語蔵三件の総計六十六件の宝物が出陳されます（二件のうちに南倉と北倉にまたがる宝物がありますので、合計すると六十七件になります）。このうち初出陳は十二件。正倉院宝物の全体が概観できるような構成になっていますが、天皇陛下御即位二十年を記念し、正倉院宝物を代表する名品が数多く出陳されます。

正倉院宝物の根幹をなす聖武天皇御遺愛の宝物としては、天武天皇以来歴代天皇に伝えられた赤漆文欄木御厨子（北倉二）の収納物で、座右の品のひとつとみなされる緑牙撥鏤把鞘御刀子や斑貝靴鞆御帯残欠が出陳されます。また、聖武天皇の后である光明皇后の真跡としてつとに名高い楽毅論は、巻末に「藤三娘」の自署がある点でも以前より注目されている宝物です。光明皇后四十四歳の筆。書聖・王羲之の模本を手本として書写したのですが、その筆致から光明皇后のお人柄が偲ばれます。

また、宝庫に伝わるペルシア起源の四絃四柱の琵琶五面の中のひとつ、紫檀木画槽琵琶が十三年ぶりに出陳されます。背面には華麗な木画、捍撥には狩猟宴楽図が表され、バルティアンシヨットがひととき異国情緒を漂わせています。このほか宝飾鏡の優品である平螺鈿背円鏡、遊戯具の優品である桑木木画碁局など煌びやかな宝物が天平の風を運んでくれます。



黒柿蘇芳染金銀山水絵箱（蓋表）（中倉）



楽毅論（巻首）（北倉）



緑牙撥鏤把鞘御刀子（北倉）

加えて、宝庫に伝わる伎楽面のうち女性を表した呉女三面が勢揃いすることや正月の初子の日に天皇が豊作を祈願して田を耕し、皇后が蚕室を掃いて蚕神を祀る儀式に用いられた儀式用具がまとまって出陳されること、異国情緒豊かな金銀花盤をはじめ供養具、献物箱の優品が揃うのも話題の一つです。

さらに、奈良時代の東大寺の莊園を描いた古地図や社会生活を伝える古文書類、仏教文化の受容と興隆を示す内外の写経など、千二百年以上前の歴史が生きた生きと感じられる宝物が本年も出陳されます。

御即位二十年を記念して、皇后陛下が関われた復元模造宝物が展示されるのに加え、本年は特別に会期が三日間延長されますので、この機会に是非余裕を持つてこ来館下さい。

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

平成21年12月8日(火)～平成22年1月17日(日) 東新館

歳末の奈良を彩る風物詩・春日若宮おん祭は、平安時代の保延二年(一一三六)九月十七日にはじまたとされています。その後祭日は、室町時代から十月二十七日、明治十二年(一八七八)からは現行の十二月十七日と変わりましたが、その間絶えることなく続いたとされ、今年で八七四回を数えます。

この展覧会は、おん祭の行われる季節に合わせて、主祭神である若宮神やおん祭に関わる品々を集め、展示を通じておん祭の一端を紹介する企画です。今回は奈良に都が置かれた時代にその祖型が伝わった舞楽に注目し、面や装束、楽器など関連資料を展示します。また、本年が発願七〇〇年に当たる春日権現験記絵巻を取り上げ、この絵巻の台として作られた「披見台」や江戸時代に作られた代表的な模本、絵巻の筆者で宮廷絵師の高階隆兼が関わった作品などを特集します。加えて、春日講に関係する資料を通じて春日信仰の広がりや多様性を感じていただければ幸いです。



◎春日宮曼荼羅 奈良・南市町自治会蔵



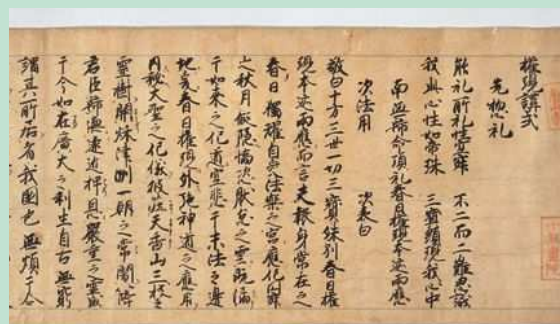
◎舞楽面 納曾利 奈良・春日大社蔵



◎春日明神影向図 高階隆兼筆
大阪・藤田美術館蔵(展示期間12/8～12/20)



納曾利装束(裾襦・袴)
奈良・春日大社蔵(展示期間12/8～12/27)



◎権現講式 京都・高山寺蔵

特集展示

南北朝・室町時代の彫刻

12月1日(火)～平成22年2月14日(日)

本館第13室

当館に寄贈された南北朝時代の十二面観音坐像と室町時代の毘沙門天立像(宝徳三年銘 一四五二)が、この度修理を終えたので、修理完成記念として平常展示の中で初めて展示します。これを機会に、寄託品の中から標題の仏像も合わせて展示する計画を立てました。14～16世紀の、いわゆる中世後期の仏像の展示です。この種の展覧は当館では約40年前(一九六七年)に特別展「室町時代仏像展」を開催しています。室町時代の仏像彫刻の史的展開をたどる初めて試みで、当時としては画期的な展示であり、それをまとめた図録集『室町時代の仏像彫刻』は、いまでも教科書的な輝きを失っていません。最近(二〇〇五年)の特別陳列「宿院仏師―戦国時代の奈良仏師―」も久しぶりの室町彫刻の展示でした。この時代の仏像もまた当館の展示テーマのひとつなのですが、これまでの展示体系ではほとんど出番がありませんでした。名品鑑賞を主体とした展示からみると、このような展示企画は異質であり、異色の展示室が構成されると思います。なお中世後期の仏像彫刻は地域性も重視されて来ますから、14世紀に活躍した椿井仏師(霊山寺の四天王立像)、あるいは16世紀の椿井仏師および宿院仏師(前者は観音寺の役行者像、後者は奈良池田町公民館の薬師如来坐像など)の動向も注目されると思います。



記録された密教修法 ——「六字河臨法記」——

斎木涼子（当館学芸部研究員）

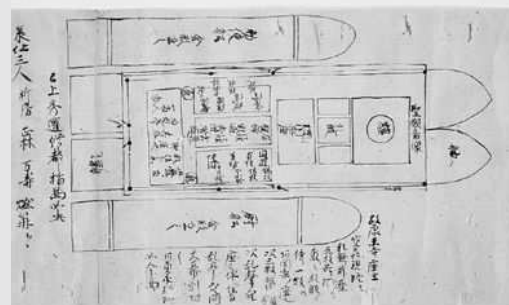
密教修法は、空海以降本格的に日本で実修され、国家安泰の祈りや様々な個人の要求に応じていった。特に十一世紀後半以降、上皇などの権力者が修法に強い関心を寄せ、如意宝珠を用いた修法など、それまでに無い新たなものが創り出されるという爛熟期を迎える。

しかし修法というのは非常に複雑で、実際にどのように像や法具が用いられ、何が行われたのか、具体的な目的は何だったのかを、私たちが理解するのは簡単なことではない。その際、理解の手助けになるのが、実際に行われた修法の様子を記録、編集した資料である。

ここに紹介するのは、六字河臨法という修法の記録「六字河臨法記」（鎌倉時代・十四世紀、当館蔵）である。『六字神呪経』『請観音経』という經典に基づいて行われる六字経法という修法があるが、六字河臨法はその変形バージョンとも言える修法である。通常



の六字経法は調伏・息災などを目的に、六字曼陀羅もしくは聖観音などを本尊とし（目的・流派により違う）、護摩壇を設け、読経や護摩のあと天狐・地狐・人の形を焼く、というものである。これだけでも興味深い修法だが、さらに六字河臨法になると、修法の最終日に川に浮かべた船の上で修法を行うという。そして神祇祭祀で用いられる中臣祓を読み、七つの瀬で祓をして三種の形を川に流すという、かなり不思議な要素をもっている。



「六字河臨法記」は、文応元年（一二六〇）に後醍醐天皇の病氣平癒のため行われた際の諸記録や文書をまとめたもので、準備のための手紙の遣り取りや参加者、道具や道場の様子が詳細に記される。これによって、二艘並べた船に板を渡し屋根を付け修法の場とした事、見物の船があつた事、棧敷にいた上皇の身に祓の儀式がなされた事、修法を執り行う僧侶の作法などを知ることが出来る。

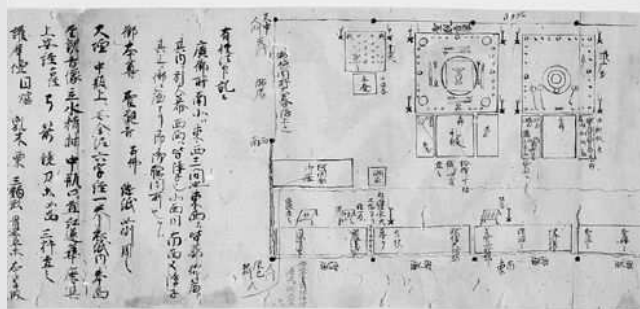
本来秘密にされるべきであろう、こうした詳細な実施記録は、なぜ残されたのであろうか。もちろん、我々のような人間が修法内容を理解しやすいように、ではない。十二世紀後半以降、真言・天台とも盛んに独自の、また新たな修法を行っ

ていったが、両宗を通じて行われる修法も多くあった。またこの頃には、宗内にも多くの流派が成立していた。そこで他の宗、他の流派との差異を際立たせるために、自派の独自性、優れている点を明確にする必要があつたと考えられる。

そこでこの頃から、大量の修法記録や口伝、またそれを編集した書物が遺されるようになる。実は六字河臨法も、天台山門派のみが行うもので、寺門派・真言宗には存在しない（通常の六字経法しか行わない）ことが述べられる。水に浮かぶ道場、神祇祭祀で読まれる中臣祓、菅拔（夏越の祓で用いる輪・茅輪）、陰陽道の七瀬祓に酷似した河での祓など、今までの修法に無い所作は、まさに新奇性・独自性を示す要素である。当時の貴族たちの眼にも、さぞ魅力的に映つたに違いない。

こうして遺された多くの修法記録や口伝は、当時の僧侶らにとつて重要な資料となつたであらう。そして現代の我々にとつても、奥深い密教修法の実態を知る、貴重な手掛りとなるのである。

なお、本巻は当年三月、藤本孝氏より当館に寄贈されたものである。





◎三尊仏龕(当館)



●光背〔十一面観音所用〕(聖林寺)



◎薬師如来坐像(当館)



◎持国天立像(東大寺)

平常展

仏教美術の名品

本館 第1～13室

10月～12月

彫刻

第1室

【大和の仏たち】

◎木造薬師如来立像(称名寺)、◎木造薬師如来立像(元興寺)、◎木造伝明王菩薩立像(弘仁寺)、◎木造虚空蔵菩薩坐像(北僧坊)〔11月29日まで〕、◎木造十一面観音立像(松尾寺)〔12月1日から〕、◎脱活乾漆・木造梵天立像、◎脱活乾漆・木造伝教脱菩薩立像(以上、秋篠寺)、◎木造持国天立像、◎木造多聞天立像、◎木造西大門勅額(以上、東大寺)、◎木造法相六祖像(伝行賀・伝神叡)(興福寺)、◎木心乾漆伝義淵僧正坐像(岡寺)、◎木心乾漆阿闍如来坐像(西大寺)、◎木造十一面観音立像(勝林寺)、◎木造十一面観音立像(地福寺)、◎木造菩薩立像(金竜寺)、◎銅造誕生釈迦立像及灌仏盤(東大寺)、◎木造十一面観音立像(薬師寺)、木造天部立像(兵庫県)、◎銅板法華説相図(長谷寺)、◎木心乾漆文殊菩薩坐像(薬師寺)

第2室

【注目の逸品】

◎木造獅子象(個人)
【興福寺伝来の四天王像】
◎木造広目天立像(興福寺)◎木造増長天立像、◎木造多聞天立像(以上、当館)

【観音菩薩】

◎木造観音菩薩立像(観心寺)、◎木造十一面観音立像(薬師寺)、◎木造千手観音立像(妙法院)、◎木造十一

面観音立像(元興寺)

【迎講の阿弥陀仏】

◎木造阿弥陀如来立像(浄土寺)

第3室

【薬師如来と十二神将】

◎銅造薬師如来坐像(当館)、◎木造十二神将立像(東大寺)

【光背の美】

◎木心乾漆光背(聖林寺)、◎木造光背(當麻寺)

第4室

【ガンダーラの彫刻】

石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫(以上、当館)

【中国石窟寺院の仏像】

石造如来頭部(雲岡)、石造菩薩頭部(鞏県)、石造菩薩頭部(響堂山)、石造螺髻像頭部(響堂山)(以上、個人)
【中国・朝鮮半島の金銅仏】
銅造誕生釈迦立像、銅造押出五尊仏、銅造供養者坐像、銅造観音菩薩立像、銅造力士立像、銅造力士立像、銅造力士立像(以上、個人)、銅造二仏並坐像(当館)、銅造如来立像(光明寺)、銅造阿弥陀如来坐像(崇久寺)

第5・6室

【中国の仏像】

◎石造十一面観音立像、◎石造三尊仏龕(以上、当館)、木造菩薩坐像、石造如来坐像、◎木造諸尊仏龕、◎石造三尊仏龕、石造仏五尊碑像、石造仏立像、石造仏浄土碑像(以上、個人)

第7室

【檀像】

◎木造薬師如来坐像(当館)、◎木造弥勒仏坐像(東大寺)、◎木造観音菩

薩立像(本山寺)、◎木造十一面観音立像(当館)

第8室

【金銅仏】

◎銅造誕生釈迦立像(正眼寺)、銅造観音菩薩立像(当館)、◎銅造菩薩立像(法起寺)、銅造菩薩立像(興福院)、◎銅造観音菩薩立像(観心寺)、◎銅造菩薩半跏像(神野寺)、◎銅造菩薩半跏像(東大寺)、◎銅造観音菩薩立像(金剛寺)、◎銅造観音菩薩立像(法隆寺)、◎銅造薬師如来立像(般若寺)

【塑像と埴仏】

◎塑像断片(奈良県薬師寺西塔出土)、塑造人物頭部(奈良県本薬師寺出土)(以上、薬師寺) 侍者像(法隆寺塔本塑像)、塑造菩薩頭部(奈良県定林寺出土)(以上、当館)、塑像断片(滋賀県雪野寺出土)(個人)、塑像断片(鳥取県尾崎寺出土)、火頭形三尊埴仏(伝奈良県橘寺出土)、六角形埴仏(三重県天華寺跡出土)(以上、当館)、多宝塔埴仏(中国)(個人)、方形独尊埴仏(中国)(当館)

第9室

【釈迦如来】

木造釈迦如来坐像(法隆寺)、◎木造釈迦如来坐像(東大寺)、木造山釈迦立像、◎木造釈迦如来立像(清凉寺式)(以上、当館)、◎銅造誕生釈迦立像(悟真寺)、銅造誕生釈迦立像、銅造誕生釈迦立像(以上、当館)

【阿弥陀如来】

木造阿弥陀如来坐像(当館)、木造阿弥陀三尊立像(峰定寺)、木造阿弥陀如来立像(個人)、木造阿弥陀如来坐像(西大寺)、木造阿弥陀如来坐像(宝冠阿弥陀)(安楽寿院)

第10室

【地藏菩薩】

木造地藏菩薩立像(十市町自治会)、◎木造地藏菩薩立像(東大寺)、木造地藏菩薩立像(萬福寺)、◎木造地藏菩薩立像(長命寺)

第11室

【大日如来】

木造大日如来坐像(元興寺町)、木造大日如来坐像(西城戸町)

【聖徳太子像】

◎木造聖徳太子立像(成福寺)、木造南無仏太子立像(法起寺)、木造南無仏太子立像(西大寺)、木造南無仏太子立像(当館)

【大將軍神像】

◎木造大將軍神坐像(大將軍八神社、木造大將軍神坐像(当館))

第12室

【動物彫刻】

◎木造狛犬(手向山八幡宮)、◎木造狛犬、◎木造獅子、木造獅子(以上、当館)

第13室

【明王像】〔11月29日まで〕

木造五大明王坐像、銅造不動明王立像、銅造大威徳明王騎牛像、◎木造愛染明王坐像(以上、当館)、木造不動明王立像(個人)

【天部像】〔11月29日まで〕

木造四天王立像(現光寺)、◎木造十二神将立像(辰末)(室生寺)、◎木造増長天立像(法明寺)



不動明王立像(当館)(11月29日まで)



◎獅子(当館)



阿弥陀如来坐像(宝冠阿弥陀)(安楽寿院)



◎薬師如来立像(般若寺)

【特集展示 南北朝・室町時代の彫刻】
「12月1日から」

木造文殊菩薩坐像及納入品(東大寺)、
木造毘沙門天立像及納入品(薬師寺)、
木造吉祥天倚像、木造十一面観音坐
像、木造毘沙門天立像(以上、当館)、
木造虎関師鍊坐像(千福寺)、木造四
天王立像(霊山寺)、木造役行者・前鬼・
後鬼像(観音寺)、木造如来坐像(妙
楽寺)、木造薬師如来坐像(池田町公
民館)、木造菅公三神像(七条天満社)

平常展

中国古代青銅器(坂本コレクション)
本館 第14・15室

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、斚、方彝、
卣、甗、鬲、鬲、簋、豆、盤、匜、
盂、壺、鐘、鈎、扁壺、蒜頭壺、甗、鍬、
博山炉、鎮子、鏡、鐙干など(当館)

パネル展示

修復文化財

地下回廊

・重要文化財 絹本着色四十九化
仏阿弥陀聖衆来迎図(京都 光
明寺)
・重要文化財 木造持国天像(内
山永 久寺伝来)(奈良 東大寺)
・国宝 毛抜形太刀(若宮御料古
神宝のうち)(奈良 春日大社)

パネル展示

地下回廊
国宝 十一面観音像(当館蔵)の
光学的調査

◎「国宝」◎「重要文化財」

すべての展示において、出陳作品を変
更する場合があります。

◆西新館の一時休館について

当館の西新館は昭和48年に開館し、それ以来、特別展あるいは平常展の
展示会場として活躍しています。

そして今後も、観覧者の皆様に、より安全に、より心地良く利用してい
ただくため、現在の建築基準に基づく耐震補強工事を実施することにな
りました。

工事にとまない、左記の期間は、西新館での展示を一時お休みさせてい
たいただきます。しばらくの間ご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解のほどよ
ろしくお願い申し上げます。

期間 平成21年11月13日(金)～平成22年10月「予定」

※なお、右の期間、西新館は一時休館いたしますが、東新館および本館では引き続
き展示をご覧になれます。毎年恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」と特
別陳列「お水取り」、そして来春に予定される平城遷都一三〇〇年記念「大遣唐
使展」に、ぜひご来場ください。

【表紙写真解説】

◎誕生釈迦仏立像

銅造 鍍金
像高八二・二cm
飛鳥時代(七世紀前半)

ルンビニーの園で摩耶夫人の右腋
から生まれ落ちた釈尊が、自ら七
歩歩み、右手で天を、左手で地を指
して、「天上天下唯我独尊」と獅子
吼した姿を表す像。本像は日本で
制作された誕生釈迦仏のなかで現
存最古の作品。造像当初の美しい
鍍金がよく残っている。全体を「鑄
し、像内を中空としないムクの像で
ある。
小さな像ながら、背中の肉のく
びれや乳を陰刻線で明瞭に表すな
ど、その作行きは丁寧である。表情
はやや判然としないが、七世紀前半
の日本の仏像様式の主流をなした
止利派のそれに近く、「品」字形を
なす衣のひだを左右対称に整える
ところも同様である。また螺髪や耳
のかたちは、戊子年(推古三十六年
・六二八)銘の銅造釈迦如来及脇
侍像など、法隆寺に伝来した幾つか
の像に近く、本像も大和の地で制作
されたかと想像させる。

岩田茂樹(学芸部長補佐)

◆仏教美術資料研究センターの
一時休館について

当館の仏教美術資料研究センターは、仏教美
術に関する図書や写真資料を数多く所蔵し、そ
れらの資料を一般にも公開しています。

このたび、当センターは、耐震補強工事にとま
ない下記のとおり休館することになりました。

休館の期間が長く、ご不便にご迷惑をおかけし
ますが、ご理解いただきますようお願い申し上
げます。

期間 平成21年10月14日(水)～平成23年3月末「予定」



展示評

特別展「聖地寧波」

―眼で見る中国と日本の仏教史―

佐藤成順（天正大学名誉教授）

この特別展「聖地寧波」には、奈良時代に戒律を伝え日本仏教を指導した鑑真・平安時代・天台宗を創設した最澄、そして鎌倉・室町（中国では宋・元・明時代）に至る寧波にかかわる仏教の貴重な遺品が展示されていた。それを見て、まず、奈良・平安の仏教からすでに寧波と関係の深いことに気づく。奈良・平安は中国では隋・唐の時代である。この頃の寧波ではまだ仏教がそれほど隆盛ではなかったが、地理的に日本と往来し易い海路だったため、仏教僧がここから航路で往来した。いわば経路地としての正確が強かった。

それが宋代になると寧波の性格が変わってくる。寧波は宋代に海港都市として顕著な発展をする。都市の発展にともなうこの地で独自の仏教が繁栄する。寧波の延慶寺で衰退していた天台宗の再興が始まり、以来ここが天台宗の中心地となる。寧波は古くは明州あるいは四明と呼ばれていたため、宋代に再興した天台宗を「四明天台」と称し、隋・唐の天台と区別する。また禪宗が天童山や阿育王山で栄えた。天台僧の中に浄土信仰が流行し、その影響で社会にも広く流布し浸透した。さらに観音信仰や舍利信仰も社会に流布した。

寧波で再興した天台教と浄土教は台州そして杭州に伝わり隆盛し、この地域が一つの仏教文化圏を形成した。そしてこの仏教文化圏は現在の上海地方にまで及んだ。この寧波で開花した仏教は、隋唐のそれとは異なる



る新しい仏教である。それが日本に伝わり、鎌倉期以降の仏教に影響を与えた。

本展では、こうした寧波を中心に形成された仏教圏の貴重な遺品と、その影響で生まれた鎌倉・室町期の名品を多種見ることができた。

杭州雷峰塔から出土した銀製の精巧な阿育王塔は、宋の仏教の基盤となった呉越国王の崇仏政策の証拠である。北宋時代の釈迦像（清凉寺蔵）は中国における釈迦信仰を表すが、この釈迦像は日本に伝来してからの役割が大きい。南宋の作という浄土五祖像（二尊院蔵）とともに法然の鎌倉新仏教の成立に密接な関係がある。また、大徳寺に所蔵する五百羅漢図は圧巻であり、天台山の羅漢信仰とこれを製作した南宋時代の明州（寧波）の信仰の様相が窺える。

南宋の著名な仏教史家の志磐の撰述と記す「法界聖凡水陸勝会修儀儀軌」（韓国・東国大学校中央図書館蔵）なる書を初めて見た。志磐は水陸会を重要視し、「儀軌」（規則作法）を著した。この書は現存するが、後世の人が大幅に手を入れている。今回、日本で初めて展示されたこの書が志磐撰のオリジナルであるか否かは検討の必要があるが、仏教史の上で注目する資料である。

泉涌寺の後方は永年宋に滞在し、四明天台の教学をはじめ、宋代に流行した十六観堂の行儀と堂宇、また律宗の再興者であり浄土教家でもある元照の戒律と浄土教を将来した。道宣、元照

の画像や十六観堂を描く東山泉涌律寺図（泉涌寺蔵）など名品を見ると、鎌倉仏教における四明天台や元照の影響が確認できる。

その他、禅関係、室町期の貴重な名品が多数展示されており、寧波仏教の重要な要素と寧波と日本との関係の長さ深さをあらためて認識した。眼でみる中国と日本の仏教史として興味深かった。



● 公開講座 ●

「御即位二十年記念 第61回正倉院展」

- 10月24日(土) 「正倉院の宝飾鏡」
成瀬正和（宮内庁正倉院事務所保存課長）
- 10月25日(日) 「金銀花盤をめぐって」
稲垣 肇（MIHO MUSEUM 学芸部副部長）
- 11月3日(火・祝) 「正倉院木工品と木彫の成立」
鈴木喜博（当館学芸部上席研究員）
- 11月7日(土) 「光明皇后の楽毅論について」
西山 厚（当館学芸部長）

特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」

- 12月12日(土) 「おん祭の舞楽」
笠置侃一（奈良大学名誉教授・南都楽所楽頭）

※各回とも、午後1時30分～3時。当館講堂にて。先着196名（午後1時に開場し、講堂入口にて入場券を配付します）。聴講無料。

● サンデー・トーク ●

- 10月18日(日) 「正倉院展 60回までのあゆみ」
永井洋之（当館学芸部研究員）
- 11月15日(日) 「愛染明王法—平安貴族の祈り—」
斎木涼子（当館学芸部研究員）
- 12月20日(日) 「春日権現験記絵巻 七百年の旅路」
清水 健（当館学芸部研究員）

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて。先着196名（午後1時30分より開場）。聴講無料。

● ボランティア解説「正倉院展の見どころ」 ●

10月24日(土)～11月12日(木) 正倉院展会期中毎日5回 30分程度
午前10時～、11時～、12時～、午後1時30分～、2時30分～、
※当館講堂にて。入館者の聴講自由
※公開講座のある日(10/24、10/25、11/3、11/7)の午後は中止

◆奈良国立博物館賛助会

2009年10月1日現在、一般会員（個人）30名、一般会員（団体）17団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円で観覧できます（共催展の場合は別途定めるものとします）。学生証および引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。

〈会員大学等〉（2009年10月1日現在）

大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、畿央大学、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、京都文教大学・京都文教短期大学、近畿大学文芸学部、実践女子大学文学部・文学研究科、就実大学人文科学部、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化女子短期大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学（五十音順）

もんじゅ ぼさつ ぎ ぞう 文殊菩薩坐像

重要文化財
奈良・薬師寺
木心乾漆 漆箔
奈良時代(8世紀)



昭和9年まで現在の西塔の場所に建っていた薬師寺文殊堂にまつられていた像で、左足を組まず、前に外して坐している。奈良時代後期に流行した木心乾漆(木彫で像の概形を造り、その上にペースト状の木屎漆を盛り上げて細部を成形する)の技法が用いられているが、木屎漆の層は薄い。木彫像としてほぼ完成の域に達しており、制作年代は奈良時代末期と考えられる。

この時期の仏像は、理想的な写実様式が開花した奈良時代盛期と、力強い量感表現と鋭いノミさばきがみられる一木彫像が全盛期を迎えた平安時代初期の、狭間に位置する。「弛緩している」とか、「煮え切らない過渡的な様式」などと形容されがちな時代への彫刻だが、少年のようなはつらつとした造形感覚を漂わせる本像には、そうした否定的な評価はふさわしくないだろう。鼻梁に対して高めの位置に配された眼の両端はきりと吊り上がり、独特の凛々しい風貌が魅力的である。丁寧に表現された頭髪の筋なども乾漆技法ならではのもので、当時の奈良の官営工房における仏像制作の実態を物語る、貴重な遺品といえる。

福島県いわき市の能満寺に、本像と大きさ・技法・様式が酷似する、虚空蔵菩薩と伝える坐像が伝来している。両像はもと一対をなしていたと考えられ、千二百年を超える時の中で離ればなれになりながらも、ともに今日まで伝えられたことは大変喜ばしい。

稲本泰生(当館企画室長)
本館第1室にて展示中

平常展の みどころ

び しゃ もん て ん り ゅ う ぞ う 毘沙門天立像



正面写真

当館所蔵(三重県個人寄贈品)
木造 玉眼 彩色
像高65.7cm
室町時代
宝徳3年(1451年)

左手に宝塔、右手に戟をとり、邪鬼を踏まえて立つ毘沙門天である。像内に銘記があり、本像が宇治成願寺伝来で、宝徳3年(1451)四月、祐泉によって造立されたことが分かる。昨年の解体修理の結果、膝裏辺に「不動」の銘記が新たに確認されたので、本像は不動毘沙門の組合せで信仰された可能性も想定される。この組合せは天台宗

の寺院に多い尊像構成であり、観音、後には如来三尊の脇侍的性格をもって造られた。本像の墨書銘では「宇治」は三重県下の地名かと推測されるものの、具体的な確証がなく、明治の廃仏毀釈で廃寺となった神宮寺等の可能性も考える必要があろう。まとものある姿態の動きは鎌倉後期彫刻の伝統を踏襲するが、忿怒の顔立ちには激しい感情が露骨にあらわれ、人間的な俗臭さを感じられる。右足を外に開いた下半身は重量感があるが、肉取りは平板で、甲冑の彫り口も手慣れている。これらの特徴は宝徳3年の銘記通り、15世紀半ばの彫刻様式とみるべきであろう。邪鬼も当初のものである。頭部部を前後に割り矧ぎ、首と足を部部から割り放って造り、両脚部を寄せるなど、鎌倉彫刻以来の本格的な構造を示している。



鈴木喜博(当館上席研究員)
本館にて

12月1日～平成22年2月14日に展示

〔像内墨書〕
(胸部) 二〇願主
(腹部) 令所願成就／祐泉／宝徳三年四月日
(背面) 宇治成願寺
(右膝部) 不動

開館予定(10月～12月)

■開館時間

平常時(～10月23日まで、および11月13日～12月31日)
午前9時30分～午後5時
(10月23日までの毎週金曜日と、
12月17日(木)は午後7時まで)

正倉院展会期中(10月24日～11月12日)

月曜日～木曜日 : 午前9時～午後6時
金・土・日曜日、11/3(火・祝) : 午前9時～午後7時
※いずれも、入館は、閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(祝日の場合はその翌日)、1月1日(祝)
※正倉院展の会期中は無休

観覧料金

□第61回正倉院展

	一 般	高校・大学生	小・中学生
当日(個人)	1,000円	700円	400円
前売・団体	900円	600円	300円
オータムレイト	700円	500円	200円

*オータムレイトは、閉館の1時間30分前以降に販売する当日券の料金です
*11月12日(木)は、御即位二十年を記念して入館無料となります

□平常展・特別陳列

	一 般	大学生
個 人	500円	250円
団 体	400円	200円

*高校生以下および18歳未満、70歳以上の方は無料です



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

*当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。